

中国・モンゴル紀行

文・梶村 昇

歌・夜久 正雄

一、出 発

中国・モンゴル紀行

モンゴルの共同調査は、アジア研究所が以前から念願していたプロジェクトの一つであったが、何分にも社会主義国家のことなので、従来の自由圏への訪問とは勝手が違って、この計画がうまく実現できるかどうか危ぶんでいた。ところが、幸いなことに、このプロジェクトが、日本とモンゴルの文化協定、正式には

「日本・モンゴル政府間文化取り極めに基づく一九七七年度年次計画」の一環として取りあげられることになったので、計画はとんとん拍子に進行した。しかし一面、気ままな研究旅行と違って、両国の外務省、大使館等と連絡を密にしながら進めなければならぬので、思わぬ手違いなども起り、出発までは、てんやわんやの騒ぎであった。事実、出発の前々日に、入国をみあわせられたい、などという電話が入ったりなどし

で大騒ぎであつたが、結局は予定通り出発できることになった。

今度の研究班は、神沢有三教授（ロシア語・モンゴル語専攻）を団長に、木村肥佐生（モンゴル語専攻）鯉淵信一（モンゴル語専攻）、夜久正雄（国文学専攻）の諸先生に、私（宗教学専攻）、記録、カメラ担当の岡部篤厚氏の総勢六名である。

昭和五二年八月二日（月）、午前九時一五分、日本航空七八五便で、無事羽田を出発した。「もう連れもどされることはありませんね」とは、離陸した直後の鯉淵さんの第一声であつたが、外務省をはじめ、すべての交渉を一手に引き受けていた鯉淵さんにとっては、まったくの実感であつたであろう。

モンゴルへ行くには、北京まで飛行機、あとは国際列車に乗って三五時間、ウランバートルに到着するわけである。われわれの飛行機は、大阪、上海経由の北京行きである。

大井川浜名湖すぎて飛行機はまた霧雲の中へ入りゆく

大阪の空は晴れゐてこみどりの濛をめぐらす大阪城見ゆ

綿のごとき白雲あまた海の上に浮べる見つゝ飛行機はゆく

白波のふちどる島々日の本の島と思へばなつかしまるゝ

白雲のうかべる海のはて遠くかすむ島見ゆ何島ならむ

漠々とつらなる雲の上を行く飛行機しづけくや
すぐおぼゆ

白波のわづかに見えて青海のもなかゆく船は日本に向ふ

大阪から上海までは二時間一五分である。高度九千メートルで飛んできた飛行機は、一二時近く漸く中国大陸の姿を見せてくれた。日本と中国との時差は一時

間である。

大いなるいくさのあとをのこすらむ大陸の上を

ゆくがかしこさ

霧雲のたえまに見え来し大陸よ田畑のみどりど

こまでもつゞく

一二時二三分、上海空港に到着した。雨で煙った空港は、二四度という気温にもかかわらず、東京と同じように蒸し暑い。漸く到着したという安堵感よりも、緊張で身構えるような気持ちで待合室の方へ向って歩いて行った。「上海」という赤い大きい文字が待合室の上に掲げられている。烈風に吹き飛ばされているような奔放な右上りの書体は、恐らく毛沢東の書ではあるまいか。「世界人民大団結万才」というスローガンも見える。いよいよ中国へ入ってきたな、という感が強い。

毛沢東万才とはあれ空港の漢字なつかし上海空港

空港のホールの壁に書かれたる毛沢東の大きな

の文字

上手下手規則不規則何ものにも抑へられざる筆

蹟と見ゆ

待合室には、毛沢東の生涯を辿る写真が陳列され、中国のプロパガンダのパンフレットが、日、英、独、仏語で印刷され、自由に持ち帰れるようになっている。恐らく中国を称える歌であろう、レコードは耳を聳するほどに鳴り、湯茶の接待をも交えて、われわれを「熱烈歓迎」してくれる。羽田の人ごみに比べれば、ここにはわれわれの飛行機しかない。閑散たるものである。待つこと五〇分ほどで、われわれはまた機中の人となり北京へ向う。北京までの飛行時間一時間三〇分である。雲の切れ間に中国大陸が見え隠れしている。「この目で中国大陸を確かめてみたい」という思いなのであろう。みんな窓辺に寄って、身じろぎもしないで眼下を眺めている。

はてしなく緑の田畑つらなりて農大国のいのち
覚えつ

赤土の土よりあかき大なる川流れたり黄河な
るべし

やすらかに旅ゆく我を家にしうれふらむ妻子
らにまがなありそね

目の下はただよふ雲のみ白くして大地は見え
大陸を飛ぶ

二時五〇分、北京空港に到着こもまた閑散とした
空港である。アメリカの飛行機が一機とまってい
銃を持った中国兵がそれを監視している。アメリカの
バンス国務長官が来ているということなので、そのた
めの特別機かも知れない。上海空港と同じように、「北
京」と書かれた赤い大きい字がくつきりとみえる。
これもまた毛沢東の書のようにである。馴れたせいか、
上海でのような緊張感はなく、気温三〇度という照り
つける日ざしの中を待合室の方へ向っていった。

二、北 京

税関は何も調べない。われわれは荷物を持ってハイ
ヤーに分乗し、宿舎の民族飯店に向った。並木がすば
らしくきれいだである。柳の並木が続いたかと思うと、
アカシアの並木に変わる。あれは槐（えんじゅ）の並木
なのだろうか。黄白色の花をつけている。長安の都で
は槐の花が散り、それを踏みしめて歩くところ進士の試
験（官吏登用試験）が行なわれたという。科挙の受験
を踏槐（とうかい）というゆえんである。車は時速八
〇キロから百キロ近いスピードで走っている。神風タ
クシーどころの話ではない。トラックを二、三台続け
ざまに追いぬいていくので肝を冷した。走ること三〇
分ほどで北京市内に入ってきた。天安門前の大通りで
ある。

驚いたことには大変なお祭りである。幾組もの行列
が、先頭にプラカードを押し立て、かねや太鼓やどら

を鳴らして、天安門前を往き来している。日本のテレビでよく見た風景なので、北京では毎日こんなことをしているのではないか、と思ったりしたが、そうではなくて、中国共産党第一一回全国代表大会（一一全大会）が成功裡に終ったことを祝してのお祭りで、今日（二二日）がその最後の日であるという。外国のテレビ会社の人であろう、道路に立って実況放送をしている姿が見られた。われわれは良い時に来あわせたものである。

私は、行列よりも、旗をふりながら列の中を歩いていて人々の表情をみていた。大人から幼稚園児くらいの子供たちまで、幾組かの行列が次々にやってくるのであるが、「熱烈慶祝」というプラカードにふさわしい顔をしているのは、先頭の人たちだけのようで、あとはただ旗を振って無心について歩いているという風情であった。しかし、それが本当の人間の姿なのだろう。行列している人々が、みんな熱烈慶祝で、生

き生きと眼を輝やかしているようだったら、それこそ異様なことだ。

四時二五分、宿舍の民族飯店に着いた。夜になって屋の喧噪さはなくなった。珍しく夜の北京はイルミネーションに飾られている。

灯もてふちどるビル美しく北京の夜は賑はへりけり

思はざるイルミネーションの北京の夜を写真にとらむとさわぐ友たち

みんな連れ立って夜の北京の街を散歩した。北京の日本大使館勤務の本学卒業生落合君が案内に立ってくれて助かった。

涼みともあそびともなく人あまた夜の大路を歩むなりけり

人々に明るきけはひありといふ友のことばのうべなはれけり

散歩しながら奇妙なことに気がついた。第一に、ど

うしてこんなに多くの人が道路に出ているのか、ということである。これはお祭りだからということではなく、毎夜のことだそうである。一つには涼をとるためであろう。次には、家の中が暗いので、外にでるのだそうである。そういえば、街灯の下で編物をしたり、本を読んだり、将棋をさしたりしている人々がいる。次に奇妙なことは、これだけ多くの人々、それは歩いていて体がぶつかる程の人出であるにもかかわらず、煙草を吸っている人がほとんどいないということである。聞けば、大体一ヶ月の収入が四〇元（六千円・この一〇月一日、鉄道労働者の賃上げが発表されたが、最低が三二元、中級で五四元となっている）、煙草は二〇本で五〇角（七五円）だそうであるから一ヶ月二千元以上になる。それでは煙草は吸えないわけである。田舎での収入は、二、三〇元というところであろう。気持ちのよいことの一つは、これだけの人出の中に、日本でみられるような無頼の徒が一人もないという

ことである。四人組追放後に解放されたせいもあって、スリ、強盗もでてきたというが、確認できなかった。

服装は、制服かと思われるほど男女とも画一的である。シャツにズボンである。それでも四人組追放後にはスカートの姿もみられるようになったとのこと。そういえば、二、三人そのような姿を見かけた。女の髪は断髪、これも全く画一的である。肥満児もなく、グラマーな女性もついにみられなかった。

旅の疲れと散歩疲れに、旅行の第一夜は死んだように眠ってしまった。

一息に眠りしごとしすがすがしき思ひに目さめ
ぬ北京の朝は

暁のカーテンひけばくれなる日はのぼりたり
北京の空に

もやかかる北京の空にのぼりたる紅の日のうつ
くしきかな



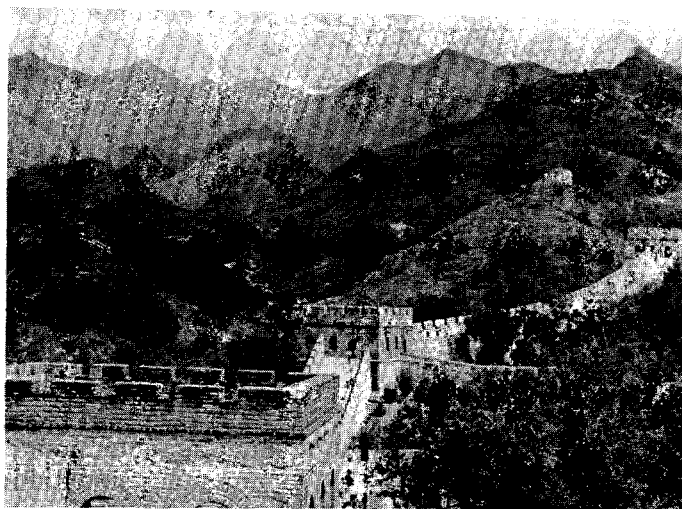
北京の目抜き通り以外は今も馬車が重用な輸送力である

窓の下はこの曉の大通り太極拳をする人ら見ゆもやかかる北京の空は晴れてゐて紅旗はためくホテルの屋根に
日の光次第に強くかがやきてけふの北京のあつさ思はるゝ
やちまたはもやにかすみて紫禁城大会堂は墨絵のごとし

八月二三日、九時、ホテルを出発して八達嶺に向つた。万里の長城の見学である。市内から車は西北に向い、フルスピードで走る。どこへ行つてもきれいな並木道である。車の

数は相当なものだが、乗用車はなく、ほとんどがトラックをはじめとした作業車ばかりである。乗用車は政府の要人が外国人に限られているのであつて、一般人々はバス、自転車である。オートバイの姿はみられない。市内を遠く離れると昔の中国の姿がみられる。一〇時四〇分、大同行きの汽車と交差した。南口鎮というところだろうか。はつきりしない。もう万里の長城は目の前にみえている。一時、長城に到着。

何としても途轍もないことをするものだ、という印象が先きに立つ。秦の始皇帝(前二四六即位)が築いた長城は、今見ているような煉瓦づくりの立派なものではなく、もっと低い土壁であつたということだが、それにしても、今の長城の遙か北方、旧満州の遼陽から始つて甘肅省の臨洮に至るもので、青森、下関間よりまだ長い距離なのである。まさに万里を越えるものであつたのである。漢代には、なおそれを西に延ばし、敦煌の西、玉門関にまで至っている。北の匈奴の勢力が



八達嶺の万里の長城・この状態に改修されたのは明時代のことで、高さ9 m、幅は上部で4.5 m、底部では9 mある。100 m間隔に墩台（とんだい）がある。

いかに脅威であったかを物語るものである。今のモンゴルは、その匈奴が自分たちの最初の国家であったと言っている。そして、われわれの目には見えないけれ

ども、中国、モンゴルの国境には何個師団という軍隊が、今も対峙しているのであろう。茫々二千年の歴史を経ても、人間のしていることは変りないものだと思わざるを得ない。

長城の風に吹かれてわが立てばあたりとよもす
蟬の声する

はてもなく草原つづきて思はざる空の高みに山
浮ける見ゆ

空高くかすみて浮べる山脈は内モンゴルの陰山
山脈

長城の石ふみくればほとりなるアカシアの林に
くまぜみのなく

岩山に立てる望樓は北狄の進入ふせぐのろし台
といふ

長城に敵近づくやのろしにて直ちに北京に通ず
るといふ

偉大なる自然は、人間を詩人にする。夜久教授に触

発されたことでもあるが、今度の旅行では、みんなそれぞれ歌をつくった。記念に、ところどころに、その一、二を記させてもらうことにした。

夏雲の湧きたつかなた陰山の山嶺にけむるモン
ゴルの空
(神沢有三)

幼き日書にて知りし長城に胸ときめかせ今われ
立てり
(岡部篤厚)

長城に立ちて望めば西のかた陰山山脈雲に浮か
べり
(梶村 昇)

長城からの帰途に居庸関へ寄った。居庸関は八達嶺より一五キロ東、すなわち、中国寄りの所にある。南北から山が迫って深い谷になっている。この谷を通してモンゴルに抜けるのである。箱根の関所というべきであろうか。ここに大理石で造られたアーチ状の関門がある。元の至正三年(一三四三)に、四川成都の宝積寺の僧徳成が旅行の安全を祈って建てたものといわれている。このアーチ状の関門の上に塔があったらしいが



元代の代表的ラマ教芸術の遺物として有名な居庸関塔基

もちろん今はない。石で作られた大きな亀が往時を偲ばせるだけである。関門にはラマ教特有の奇怪な彫刻があざやかに彫られている。元代の唯一完全なラマ教芸術の遺物といわれているだけに、その彫刻はすばらしい力作である。それにしても、元という国はこれくらいのもので残していかなかったのであろうか。さみしい限りである。ただ、塔基の内壁には、サンスクリット、チベット、パспа、ウイグル、西夏、漢の六種の文字でもって陀羅尼が刻まれていて、今もはつ

きりと読むことができる。言語研究の資料としては貴重なものである。

パスパ文字 西夏チベット中国ともろもろの文字刻まれにけり

いにしへの国々の文字を門壁にたどりてその世の人を思ひぬ

居庸関うてなの石の上に立ちてめぐる長城見はるかしけり

名に高き居庸関あと荒れはてゝ草しげりたり訪ふ人まれに

居庸関を出て明の十三陵を訪ねる。この辺はおさまりのコースのようである。あまり車にも会わない長い並木道を走るのは快適であるが、その道を馬車で荷物を運んでいる貧しげな農民の姿をみると心痛む思いがする。そんな思いでみた定陵の豪華さは愚かしさの極みのように思われた。これは明の第一四代万暦帝（一五六三—一六二〇）の墳墓である。彼はこれを二〇歳す

ぎから作らせ始め、六年の歳月を要し、総費用は、当時の明の二年分の経常費にあたる八百万両を消費したという。この地下の宮殿、といつてもたかが自分の墓に過ぎないものに、この豪華さと、その浪費とは、見ているものに異常としか思わせないものがある。こういう異常さは、日本ではかつて経験しなかったことである。万里の長城といい、定陵といい、中国の権力者に流れる狂気じみた血のつながりを恐ろしいとさえ思った。

旅遠く明の大廟たづね来て地下出でかねつふる夕立に

うつくしき風景しめて大いなる廟はあれどもまづしき民らは

五時半ホテルに帰る。夕食後ホテルから北京の街を見ると、昨日のお祭りとはうって違ってイルミネーションはなく、暗い北京の街に、街灯だけがやや明るく続いている。その中を家路に急ぐのであらうかたくなの自転車が無灯で走っている。古い北京の街を思わ

せる煉瓦の家々は、徐々に取りこわされ、新しい洋風の団地形ビルが建てられつつある。このホテルから見えるだけでも一五棟くらい建っている。古いものがこわされるのは、いたしかたないにしても、あの煉瓦で囲まれた独特な中国の家並みがなくなつて、安っぽいビルがそれにとつて代るのは、何ともさみしくやりきれない気がする。

私はふと、彼らが、暗い家の中で、どのような時を過しているのだろうか、と思つた。今、私の立つているところは、北京の目抜き通りなのである。そこでこのような感懷を抱かせられるとしたならば、田舎の方ではどう感じさせられることだろうか。いや、むしろ田舎の方に、昔の中国が残っているかも知れない、と思つてみたが、どうにも見当がつかない。第一、われわれは直接中国人に接することができないのである。たとえ、できたとしても、彼らは本当のことを話してはくれまい。また、話してくれたとしても、私はそれを

ここに書くわけにはいかない。その人が忽ちに迷惑を蒙るからである。

中国はわれわれを招いてたくさんものを見せてくれた。これからも次々に見学させてくれるであろう。こうして一人一人を中国の理解者にしていくとするのが中国の方針であるらしい。この理解者を彼らは「友人」といつている。それはありがたいことなのであるが、もし本当の「友人」を作りたいならば、本当の姿をみせるべきではなからうか。人間のやることだから良いことも悪いこともあるにきまつている。良いことだけをみせられれば、かえつて疑心暗鬼にさせられるだけだ。

私は、定陵をみせられて、当時の民衆がいかに苦しめられてきたことだろうか、と思つた。文字通り食うや食わずの生活ではなかっただろうか。それに比べれば、今の中国は遙かに豊かなのかも知れない。しかし、私はその実証を自分の目や耳で確認していない

三、 国際列車

のである。肉や魚は、一年に一、二回の配給切符を受けるだけ、という話を聞いたこともある。それが嘘か本当か、確かめられない。嘘であるなら幸いだし、たとえ、それが本当であっても、新しい中国を作るために、といって意気軒昂であるならば、それもまた結構なことだと思う。「友人」ならばこそ真実を打ち明けるべきであるし、「友人」ならばこそ率直にものを言うべきであると思っている。そうでなければ、中国についての理解者、彼らのいう「友人」は生まれてはこないであろう。「巧言令色鮮し仁」とは、中国で作られた名言ではないか。中国についての齒の浮くような「巧言令色」がいかに日本に氾濫していることか。まさかそのような人々を、中国の人が本当の「友人」とは思っていないであろう。心ある日本人もそのような人を信頼はしていない。

明日はいよいよモンゴル行きである。一〇時就寝、英気を養う。

八月二四日、六時に起床して、食事もせずに北京駅に向った。駅は大変な混雑で、昔の中国の雑踏の街を思わせるような感じであった。その中を外国人だけは特別室に入り、特別改札口から列車に乗りこむようになっていた。ありがたいことだが、列を乱して一番先に立ったような後ろめたさを覚えた。

八時七分、モスクワ行急行国際列車は、定刻に発車した。寝台車で四人一組になっていて、なかなか快適である。ウランバートルまでこれから三五時間、やはり大変な旅だと思う。汽車に乗ったとたんに、ぶっと独特な臭いがした。これが中国の臭いかも知れない。そんなことで、暫くはそれぞれの民族の体臭について話に花が咲いた。日本人は味噌臭い、魚臭い、アメリカ人は動物園の臭いだなどと、海外の経験の豊富な人たちなので、世界各国の人々が組上にのった。

汽車は時速四〇キロ程度で、昨日行った八達嶺に向
って走っていく。この紀行文も暫くは夜久教授の歌に
おまかせすることにしよう。

長城のトンネル過ぎてわが汽車は青竜橋の駅に
つきけり

青竜橋の駅のホームに降り立てば秋のけはひの
さはやかにして

おのづから山の姿のおだやかにあらたまりけり
長城すぎれば

八達嶺の岩山のまの谷すぎて草山のまの草原つ
づく

モンゴルの歌かきつけよとわが友のたびしノ
トにうたかきつくる

くだりゆく汽車の窓よりかへりみる長城の山う
すがすみゆく

白々と大きみづうみさはやかに見えきつと見ゆ
草原のはてに

一すちの河白く見ゆ高原のはるかにかすむ山に
つくあたり

のこぎりの刃なす山々かきなりて陰山山脈姿見
せきぬ

張家口いづくなるらむ北白川宮永久王殿下戦死
の土地は

高原のはてなる山のとがりほの下のあたりか張
家口市は

旅遠くわれら来りぬ夏雲の群れ立つ陰山山脈近
く

もの珍しげに子供たちが、われわれの座席にまで遊
びに来た。父親が中国人、母親がモンゴル人という女
の子がわれわれのためにモンゴル語の歌を歌ってくれ
た。ゲレル（月の光という意味）という名で、一一歳
であるとのこと。

愛らしきモンゴル少女のいっしんにモンゴルの
歌をうたふをぞきく

ゲレルとふ名もあいらしきモンゴルの少女と汽車にあひて別るゝ

歌は「青空は子供を呼んでいる」とか「ラクダの子供」とかいう可愛いものであった。差し出したノートに、モンゴル語できれいに歌詞を書いてくれて、照れていた。私は今、ペンを置いて暫くゲレルちゃんのことを思いうかべてみた。

わが手引きラクダの群を見よといふゲレルの姿

まなかひにあり

(梶村 昇)

食堂車で昼食をすませ、座席にもどつて、また窓外の景色をみる。同じ草原が続いているようにみえても変化があるのであろうか。いつまで見ても飽きないから不思議だ。二時三五分、大同駅を通過した。有名な雲崗の石仏があるところだが、汽車からは見えな。いつかまた見に来たいものである。四時三十分、集寧の駅についた。陰山山脈の切れるところである。いわば内モンゴルへの入口というべき町である。

岩山に雲立ちわたる陰山のふもと高原どこまでもゆく

草原に羊の群の見えそめて内モンゴルに汽車近づけり

ゆく汽車の鉄路にそひてどこまでもつづく草丘モンゴル草原

うちつづく草丘の上のそこゝに見ゆる土壇は昔の望樓

どろをもてかためたる家かたまりて村をなすらし漢人たちは

空につく山は見えずに見るかぎり平原つゞけり地平線まで

モンゴルの平野のはては草丘の地平をかぎれり起き伏ししつゝ

モンゴルの草原をゆく汽車の中るながらにして日にやけにけり

内モンゴルとはいえ、モンゴルという名のついてい

る以上は、モンゴルに相違ないのであるが、どうして内外モンゴルが分離しているのだろうか。それは清朝時代に、清朝の支配が内モンゴルでは確立していたが、外モンゴルでは多分に名目的であつた。そのために、内モンゴルには早くから漢族が移住し、清朝末期には、すでにモンゴル人より漢人の方が多かつたといふことに起因するらしい。それにもまして、ゴビの砂漠がモンゴリアを南北に分断しているからではなからうか。そのゴビの砂漠に日が落ちようとしている。

はるかなる地平の丘に夕日さして点々と白く羊
ゆくらし

夕日さすモンゴル平野ははてしなくひろがりて
はて空をかぎれり

放牧のラクダのむれのゆく汽車の線路のわきを
しづかにあゆめり

空かぎる地平のかなたの棚雲にモンゴルの日は
いま沈みゆく

あまりの美しさに一同にわか詩人となる。その名作を少し。

落陽を地平にながめモンゴルの大草原を今し旅

ゆく (神沢有三)

あかね雲たなびくかなたまどかなる夕日は沈む

ゴビの地平に (全)

みはるかす地平のかなた日はまさに沈まんとす

るゴビの砂漠に (梶村 昇)

七時一五分日没。

見るかぎりつゞく草原日のおちて夕さびしきい

ろとなりけり

モンゴルの空の清さよ空かぎる地平たひらに四

方にめぐれり

モンゴルの大きき夕空日の落ちて青みましつゝく

れまさるなり

くれ残るモンゴルの空青くして地平にともると

もしびひとつ

くれなづむ空は渺々紫のゴビの地平にともしび
の見ゆ
(木村肥佐生)

まかがやく大きな星見ゆ明け白むゴビの地平の空
の高みに

うつくしきゴビの星かげオリオンは地平に半ば
かくれたりけり

夜の九時五三分、正確に国境の町二連に到着した。

イルミネーションに飾られたきれいな駅である。国境
の駅は、対外的な意味もあって、どこでもきれいなも



中国とモンゴルの国境に立つ石
上は中国側・下はモンゴル側

のである。出国手続をすませ、駅の待合室へ行く。そ
の間に、汽車は今までの狭軌の車を、広軌に変える作
業をする。暑くなく寒くなくすがすがしい星空の下で
同乗の外国人たちと雑談をする。みんなの話を総合す
ると何と一ヶ国の人々が乗っている。メキシコ人、
東ドイツ、西ドイツ、オーストリア、ポーランド、ベ
トナム、イギリス、フランス、中国、モンゴル、日本
人である。文字通り国際列車である。

一一時三〇分、二連の駅を出発、わずか五分で国境
を通過した。墓石のような石が国境線に立っている。

監視所らしいものもあり、あとは鉄条網を張った杭が
延々とつながっているだけである。真夜中だというの
にこれだけのものが見えるのも白夜のせいだろうか。

一一時四三分、モンゴル領の国境の駅ザミンウデに
到着。入国審査が始まった。国境警備隊のなかなかい
かめしい兵隊が、パスポート、検疫証明、荷物と次々
に調べてゆく。とくに書物の検査がきびしく全部あけ

させてみていた。聞けば、中国関係、反共宣伝関係、風俗関係の書物は没収されるらしい。「毛語録など持っていたら大変なことになった」と笑いあったことだった。検閲が終り、駅の待合室で、はじめてモンゴルのお茶を飲んだ。

その間に、同乗していた中国人の旅行者が徹底的に調べられていた。トランクは全部ひっくり返され、とどのつまり、駅の公安室に連れていかれて多額の金を徴収されたらしい。「煙りの出る葉」(？)がひっかったとのことである。

憎しみとも思えるモンゴル・中国間の争いを、まああたりに見た感じがした。ウランバートル在住の中国人は、職にもつげず、旅行もウランバートルから三〇キロ以上は出てはならないことになっているとのこと。「民衆はお互いに罪もないのに」と思えるが、政府の当事者にすれば、「民衆ほど御しがたいものはない」とでもいうのであろう。

午前一時三〇分、漸くわれわれは寝についた。長い一日であった。八月二五日、午前六時、車中で眼をさました。諸先生はすでに起きていて、ゴビの砂漠に昇る朝日を待っている。

くろ雲のたなびくかなた黎明の空にかがやく暁の明星 (神沢有三)

旭日の昇らんさまを眺めんとしばしの間を車窓に待てり (全)

暁のゴビの地平はどこまでもつゞきてつひに円をなすらし

明けなづむゴビの地平に豁然と日は出でにけりをどるが如く

かがみなす瑞の朝日子ひらめきてくるめきめぐる光たふとき

何もなきゴビの地平にをどり出でし瑞の朝日よをろがまれけり

遅れ走せながら私も一首。続けて木村先生。

目がさめて見て驚きぬ日はまさに地平かなたに
昇らんとする
(梶村 昇)

息をのみ見入れる友の顔もまたこがねにそまり
ぬゴビの日の出に
(木村肥佐生)

明けてゆくゴビの地平の空のいろさみどりの色
透るばかりに

明けてゆくゴビの地平のむらさきのおき伏す雲
は山かとも見ゆ

サイン・シャンダの駅についた。出発前に日本の外務省に電報が入り、このサイン・シャンダの近くで、国際列車が転覆炎上し、わずか二輛を残すだけだったという話だった。こんなニュースもモンゴル政府が発表したわけではなく、その汽車に乗っていた外国の大使館の人から聴いたことなのだろう。その痕跡をみつけようとしたがわからなかった。

降りたてば冷え入らんとすモンゴルのサイン・サイン
ヤンダの夜半のフォームは

大いなるたつ巻き雲の地の果に見えてをりをり
いなびかりする

地の果に竜巻雲のあらはれて雨降れるらしいな
びかりする

ゆく汽車のほとりの岩にわし一羽みづくろひす
も朝日をあびて

夜一夜汽車は走りて明けにけるゴビの地の果に
山脈見え来つ

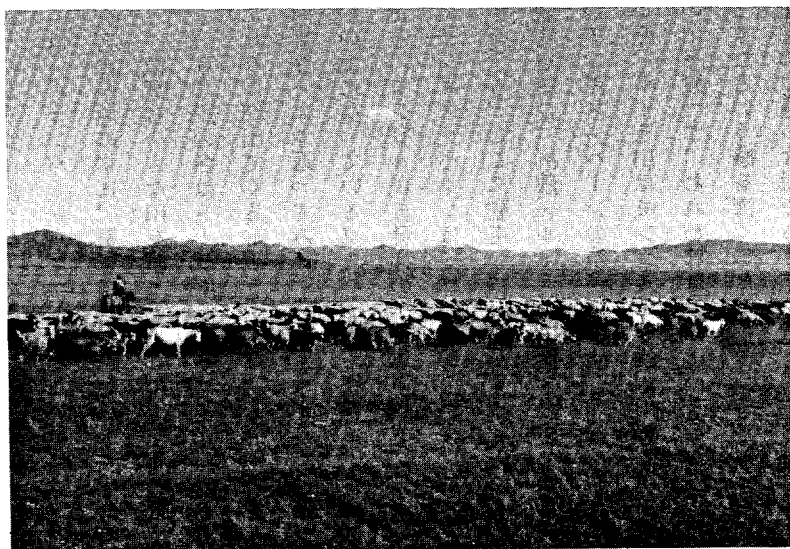
地の果にかすみてつらなる山脈のなつかしきか
な低くはあれど

青き水たゝふる湖と思ひしは雲のおとせる影に
てありけり

地の果の竜巻雲をふちどりて虹立てる見ゆゴビ
の草原

なだらかな草丘の背の稜線の空をかぎりてつゞ
くやさしさ

続きに続くモンゴルの草原である。ウランバートル



もっとも典型的なモンゴルの放牧風景、約300頭くらいか

在住二年間という鯉渚さんは、故郷へ帰ってきたような気持ちらしい。

むらさきのあざみの花よりどうぞよ心はかへる
モンゴルの日々に

(鯉渚信一)

かさをなすモンゴルのこの朝空を白斑しろくまの鷹のか
けりゆく見ゆ

飛びすぎるシャーチガイかも日に映えて羽ぶき
はげしく白き輪をなす

シャーチガイとは、かささぎのことである。先年、
韓国を訪ねたとき、扶余の森で見たかささぎのことが
一瞬間にうかんだ。

青き空かぎる草丘の尾根をゆくはるかな馬のか
げくろく見ゆ

おだやかな草丘の尾根暁の空をかぎりてつづく
しづけさ

長い汽車の旅もいよいよ終着点近くになった。なだらかな起伏は、勾配の強い草原に変わり、から松だらう

か、林が次第に多くなってきた。一二時過ぎ、子供たちは「ウランバートルだ」と叫んだ。見れば、はるか彼方の草原の中に、蜃気楼かと思われるような街がある。汽車は小さな川を渡った。この川を渡れば市内だという。川の名はトール川という。『元朝秘史』の中にたびたび出てくるトール川とは、この川のことかと感慨深くふり返ってみた。チンギス・ハーンは、この川の源になっているブルハン山の牧地に生まれたのである。モンゴル民族発祥の地である。

チンギス・ハーンは、ブルハン山から、このトール川を下り、ここに駐屯していたケレイト族の王ハンと盟約を結び、仇敵メルキト族を撃ったのである。それがチンギス・ハーンの統一の序曲となったわけであるから、トール川はモンゴル史を飾る川ともいえる。その川を渡って、われわれは、いよいよモンゴルに入ってきたという感を深くした。ウランバートルは、山に囲まれた静かな街である。

四、ウランバートル

一二時五〇分、ウランバートル駅についた。同乗の外国人たちは誰も下りない。そういえば彼らは、バイカル湖のほとり、イルクーツクへ行くといっていた。日本大使館の斉田さんの出迎えを受け、ひとまずホテル・バヤンゴル（豊かな川の意）に到着した。一休みする暇もなく、モンゴル科学アカデミーの国際部長ツエグミッド氏が待っているとの事で、木村先生と一緒ににお訪ねし、一応の挨拶をした。われわれの会見中にも、秘書らしい人が、われわれの話を記録し、ツエグミッド氏は時々彼女に向って、承諾を求めるように話しかけていた。単独では外国人に会わないということであろうか。そのあとホテルに帰り、一同揃って日本大使館に挨拶に出かけ、秋山大使にお目にかかった。夜はウランバートルホテルの食堂で夕食をとり、一〇時二〇分モンゴルの第一夜を迎えた。

八月二十六日、七時二〇分起床、朝から尾籠な話で恐れる次第だが、極度に野菜の少ないモンゴルでは、便が兎の糞のようにコロコロして、紙でふくような必要はない、という話を東京で聞いていたが、まさにこの日の便がそうであった。「一夜にして私はモンゴル人になったよ」と、その適応性のすばらしさを吹聴して歩いた。しかし、それはまったくその朝だけのことであって、何と翌日から北京に帰りつくまで、コレラの予防注射が効きすぎたのではないかと思われるような水のような便ばかりで、これにはまったく閉口させられた。体の調子の悪いことは、あまりお互いに口にしないでいたが、何と全員多かれ少かれ下痢症状であつたらしくそれがまた不思議なことに、北京で、一斉に治ってしまった。治つてしまえば、お互いに白状して大笑いした次第であつた。

閑話休題。ツェグミッド氏の連絡はまことに手際よく、われわれは午前中早速、科学アカデミー言語文化

研究所長ルブサンデンデブ氏に会うことができた。氏はモンゴル語の権威で、神沢教授は、氏の著わされた『ロシア語モンゴル語辞典』を持参されていた。言語関係の夜久、木村、神沢、鯉淵の諸先生から、いろいろ突つこんだ質問がなされたが、いずれその成果は『アジア研究所紀要』に発表されることであろうからここでは割愛する。ただ、氏が、外来語を翻訳する基準として、体系的、統一的、民族的という三つの原則を強調されたことが非常に印象的であつた。新しいモンゴル語は、すべてこの研究所から生まれることになっているのだそうだが、その研究所が、こうした三つの原則を強調されているところに、モンゴルのバックボーンを垣間みた思いであつた。

ちまたゆく人もまれなりたまにゆく人の歩みも
ゆつたりとして

モンゴルの人の歩みはしかく／＼と教はりて見る
人の歩みを

午後は市内見学にでかけた。われわれの案内についでくれた人は、ツェンデオチル君という三〇歳くらいの青年と、サロールさんという、ことしウランバートル大学日本語科を卒業したばかりの女性である。自由圏の国々でいえば、旅行社のガイドさんということになるが、社会主義国のモンゴルでは、立派な国家公務員である。それどころではない。数少ない外国人に接し、そこでモンゴル人民共和国の、大げさにいえば威信を示し、その上、悪くいえば、われわれの行動を監視するという役目も担っているわけであるから、相当な要職といえるであろう。ツェンデ君は日本語はできないが、英語はよくでき、数回、イギリスやアメリカへも行ってきたとのこと、なかなか筋金入りの好青年に思われた。サロールさんの日本語はまだたどたどしいものだが、これまた優等生タイプで、ふらふら勝手に遊びにでもやうものなら、叱られそうなこわい人だった。彼女もそうであるが、モンゴルでは、最初

から卒業後の職場がきまっていて、そのために勉強するということである。いわば人間も計画生産なのである。亜細亜大学でも、モンゴル語を勉強しているものが三〇人くらいいるよ、と言うと、眼をまるくして驚いていたが、その人たちは、自分で勝手に仕事をみつけるのだ、と言うと、さらにびっくりして、「先のこととがわからないのに勉強しているのか」と言っていた。そういわれればそうで、こんどはこちらがうなずかされた。人口の少ないことが計画生産できる一つの原因なのである。

モンゴルの面積は日本の四倍あるが、人口は一四六万八千人（一九七六年調）というから、日本の一〇〇分の一・三である。いかに人口が少ないことか。そのせいでもあるまいが、大学生たちは多く結婚しているそうで、事実、サロールさんも大学を卒業したばかりであるというのに、もう子供がいるとのことであった。ツェンデ君は、車をとめては、あの建物は何、この

銅像は何と説明してくれた。もちろんそれは一九二一年の人民革命の勝利と、それ以後の第何次五ヶ年計画のことであつた。

モンゴルといえば、日本人はチンギス・ハーンのことくらいしか知らない。しかし、モンゴルへ行けば、彼は、外国を征服、略奪した反民衆的、反動的巨魁という烙印を押されているのである。社会主義の理論からいえばそうなるかも知れないが、モンゴルの生んだこの世界的人物が、彼らの脳裡に悪玉として定着していくだろうか、私は疑問に思う。そんなことで、ツェンデ君の説明には、チンギス・ハーンのこととは少しもでてこない。事実、私たちの会った何人かのモンゴル人の中で、二、三の人々は、その紹介の言葉の中にチンギス・ハーンの直系とかチンギス・ハーンと盟約を結んだ誰々の系譜につながる人であるとか、いうような紹介を受けたことがある。実際、私は驚いたので、感謝した面持ちで、「チンギス・ハーンの直系ですか」

と相槌をうつと、先方は満更でもないような顔をしてゐた。彼らの胸中には、反動といわれようと、侵略者といわれようと、モンゴルの生んだチンギス・ハーンは「英雄チンギス・ハーン」として生きつづけていくのではなからうか。建て前は建て前としておけばよいのであろう。

モンゴルの歴史は匈奴に始まる、と彼らは言っている。たしかに、匈奴は前三世紀から約五〇〇年間、モンゴルの地に繁栄した遊牧騎馬民族である。匈奴の王として有名な冒頓单于（BC二〇九—一七四）は、漢の高祖を大同の南東白登山に破り、高祖は危うく難を逃れて、ついに和を乞うたといわれる。また、冒頓から数えて一三人目の王呼韓邪（BC五八—三二）は、漢の元帝に通婚を望み、ここに王昭君悲話が生まれてゐる。匈奴がいかに強力な国であつたかを物語るものといえよう。しかし、匈奴は今のモンゴル族ではなかつたのである。いかなる人種であつたか定かではない。

学者は、匈奴が白人種の体型をもっていたとさえいつているものがある。モンゴルの土地は、その後もさまざまな種族によって、とって代わられたが、モンゴルの土地が今のようにモンゴルという名でよばれるようになったのは、まさしくチンギス・ハーンの出現によってであることはたしかである。モンゴル族は、それまでは、先にも書いたように、黒竜江の上流オノン川の源であるブルハン山を中心に生活していた弱小民族に過ぎなかったのである。モンゴルの歴史学者であるシレンデブ氏（科学アカデミー総裁）は「単一のモンゴル封建国家は、一二〇六年に、多数の小さな国や種族同盟から結合されて成った」（『資本主義をとび越えて』松田忠徳氏訳・シルクロード社）と述べているが、それはチンギス・ハーンの偉業なのである。

一二二七年八月一八日、チンギス・ハーンは、七〇歳近くで亡くなった。彼の墓は故郷のブルハン山近くにあるらしいが、いまだに誰もその地点を知らないとい

いう。その理由は、北方の遊牧民は、地中深く墓を掘り、地上に何の標識もつくらないからだという。中国の『草木子』という本には、モンゴル人は死ぬと、地中深く穴を掘って埋め、その上を馬を走らせ地ならしし、つぎに棺を埋めた真上の地点に、仔ラクダを持つ牝ラクダをひいてきて、仔ラクダを殺す。親ラクダは仔の死体に鼻をこすりつけて悲しげになく。翌年になって墓の所在は分らなくなっても、親ラクダを連れてくれば、自分の仔が死んだところで必ず泣く。人々はそこへ行つて、地に乳を注ぎ祭りを行うと書いてあるそうだ。

チンギス・ハーン以後のことは、すでに世界史が示すとおりである。モンゴル帝国は、当時知られていた世界の五分の三を征服したのである。その版図は、東はインドネシアから西はポーランドに及んだ。しかし中国大陸を征した元朝は一〇〇年足らずで一三六七年、明朝にとってかわられ、中央アジアを征したチャガタ

イ・ハーン国は一三七〇年に滅亡し、ペルシアを征したイル・ハーン国は、一四一一年に、ロシアのキプチャック・ハーン国は一七八三年に滅んで、さしものモンゴル帝国もここに終焉を告げたのである。とはいっても、モンゴルは潰滅したのではない。その後はカラ

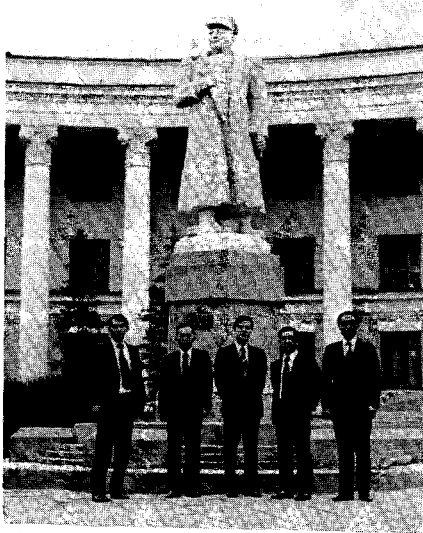
コルムに本拠を置くタタール部と、その西のオイラト部との対立は続いたものの、時に勢力を得て、東は朝鮮半島、西は新疆省まで領有し、チングス・ハーンにつぐ広大な版図を有したこともあった。明朝は、彼らのたびたびの侵略に悩まされて、万里の長城の修築を行なった。われわれが立つてモンゴル草原を眺めた八達嶺の長城は、この明時代の修築になるものであった。その西の涯は嘉峪関に至った。嘉峪関の西は、すでに玉門関である。唐の詩人王昌齡は

青海の長雲 雪山暗し 孤城遥かに望む玉門関
黄沙百戰 金甲をうがつ 楼蘭を破らずんば終
に還らじ

と詠っている。唐朝の詩人の歎きは、千年後の明の人の歎きでもあったであろう。

一六四四年、明が滅亡し、満州族の清が中国を統一した。清の太祖の母はモンゴル系満州人であった。その上、ラマ教が両者を結んでいた。こうして長い間交戦を続けていた中国大陸の王朝とモンゴル草原の統一者とは、珍しくも和平の道を選ぶことになった。しかし、それはモンゴルが清に支配されるという形においてであった。一六九一年のことである。モンゴルの政教を一手に握っていたジェブツンダンパ・ホトクトは北京や熱河で清の康熙帝と同席し、康熙帝が病気になるれば、ホトクトが祈禱をするという関係にまで至ったのである。清はモンゴルを行政的に細分し、百以上のホシヨ（旗・行政単位）を作って、清朝に反抗する勢力の結集をはばんだ。この結果二〇〇年以上、モンゴルは清朝の治下に置かれた。

一九一一年、辛亥革命が起り、清朝は滅亡、代って



ウランバートル大学に立つチョイバルサンの銅像・調査隊一行、右から、神沢、木村、梶村、夜久、鯉渕の諸氏（岡部氏は撮影）

中華民国が成立した。これを機にモンゴルは独立を宣言したが、外国はどれもこれを承認せず、再びモンゴルは中国の自治領となった。一九一九年、首都ウルガ（現在のウランバートル）に、二つの革命的秘密グループが生まれた。一つはスフバートル（一八九三—一九二三）を中心としたウルガ・グループであり、他の一つは、チョイバルサン（一八九五—一九五二）を中心としたロシア領事館グループである。一九二〇年、

この二つのグループは合体して「モンゴル人民党」を結成した。そして一九二一年、彼らは武装蜂起し、ソビエト軍の協力によって、中国及び当時モンゴルに勢力を張っていた白系ロシア軍を駆逐し、ここにモンゴル人民共和国の成立をみたのである。

モンゴルの歴史をたどれば、大体以上のようなことになるであろう。市内には、若くして弊れた革命の士スフバートルの馬上姿の銅像が立っている。そのほかチョイバルサン、そしてレーニン、それにおもしろいことにはスターリンの銅像も立っている。スフバートルはレーニンに比較され、チョイバルサンはスターリンに比せられているという。そういえば、チョイバルサンは、一九三九年から亡くなる五二年まで首相の座にあったのであるが、一九三六年から三九年にかけての彼の行動が総括されたこともあるし、その点も何やらスターリンに似たところもあるようだ。ソ連と一枚岩のようなモンゴルが、スターリンの銅像を、しかも

われわれがよく出入りした科学アカデミーの正面に立っていることは奇妙なことだと思った。

車は、われわれを郊外の山頂の戦勝記念塔の方へ連れていった。モンゴルの革命以来、今日に至るまでの国内外の戦いの勝利を記念し、その戦いに弊れた人々を祀っている。「あなたの輝くいのちはわれわれの内」に宿り、あなたの名譽はわれわれの生活と共にある」と記されている。小高い山から一望に見えるウランバ

ートル市は、限らない草原の一大オアシスのように思える。近代建築のビルと、草原にはりついたようにみえる包の群れとが、澄みきった青い空の下で、静かに息づいているという感じである。「ブルースカイの国モンゴル」である。

八月二七日、アカデミーのお世話でウランバートル大学を訪ね、言語関係の学部長をはじめ、諸教授列席のもとに、言語及び言語教育に関する熱心な討論が開始された。モンゴル人をして「あの方は本当に日本人

ですか」と言わせるほどのモンゴル語を駆使される木村先生がいらっしゃらなければ、この討論もまったく形だけのものになってしまったであろう。その日の午後、そして翌八日の午後と、二回にわたってわれわれは詳しく国立中央博物館を見学して歩いた。

八月二八日、今日はガンダン寺を見学に行く。

垣山に雲たなびきてさはやかにけさも明けにけりウランバートル

九時前、ガンダン寺につく。ちょうど朝の法要が始まる時で、黄帽をかぶった年とった多くのラマ僧たちが本堂に入るところであった。ホルンに似たラグドゥンの音が聞こえ、間もなく、デンシグ（小鉦）、ホンホ（振鈴）、ジン（磬）などの楽器にあわせ、読経が始まった。読経が終ると朝食になり、大きな碗に山盛りのご飯が盛られた。その食慾にはびっくりさせられるほどであった。老僧たちの顔つきは、立派な、むしろ精悍ともいえるように見うけられた。

社会主義政

権下における
宗教の実態と
いうことは、
私のもっとも
知りたいこと
であった。ア
カデミーも、
私の要求を容
れて、このガ
ンダン寺の長
老や東洋哲学専攻の学者との話合いの場を作るよう取
りはからってくれたようであったが、ついにそれは実
現に至らなかった。いろいろな都合があったことは、そ
のつど私に連絡はあったけれども、結果的には会えな
かった。残念ではあったがいたし方ないことだった。

『モンゴルのラマ教』（ジェー・サンブー著・人民大



これから本堂に入って法要を始めよ
うとするガンダン寺のラマ僧たち

会幹部会議長・外務省アジア局中国課記」とか『モン
ゴル人民革命党略史』（党史研究会）とかを読んでみれ
ば、彼らの答えがどのようなものであるかは、およそ
の見当はつくので、それ以上お願いすることもないと
思っ て ひ き さ が っ た。これらの著書が書いているよう
に、かつてのラマ教寺院やラマ僧などの行為がいかに
反動的であったかは、わからないでもない。マルチン
・ルーテルが「人間は馬のようなもので、騎手に御せ
られている。それは神であるか、さもなければ悪魔で
ある」と言ったそうだが、ラマ教寺院をみていると、
モンゴル人は悪魔に御せられていたとさえ思われる面
もある。しかし「人間は神に御せられなければならない
い」ことも事実なのである。人間が人間を御しきれる
と思っ っ て いる ならば、それは大変な錯覚であることに
気づかなくてはなるまい。このことについては、また
稿を改めて書かせてもらいたい。

ガンダン寺、中央博物館見学後、日本人墓地を訪ね

た。車で二〇分ほどかかったであろうか。山に囲まれた南の斜面は、車からみれば、うららかな陽だまりのように思われたが、降りてみて風の強いのに驚かされた。ここに眠っている人々は、みんな戦いの終わったあとに囚われ、病いを得て亡くなった人々なのである。八三七人の人々が眠っているという。

秃山の麓の野末まさびしく風鳴りわたる日本人墓地

垣山の尾の上の空はただ晴れてますみのいろのかへりてさびし
とらはれの身をなげきつゝうせにけむ人を思へば身ぬちもさむし
すめらぎのみうたとなへてとつくにの野べにうせにし人とむらひぬ
墓地荒れて青草はただなきがらのうへのみ生ふと聞くがかなしき
うせにける人々の名を石くれにはりたる紙もち



りゆかむとす
板きれの墓標のあるはおとづれし遺族のありて
たてにけむかも

大方はただ石くれに名をしるす小さき紙をはり

アムラルト日本人墓地。この方が墓地の傍に住み、墓地を管理してくれている。正装して私たちを迎えてくれた。

て墓とす

モンゴルの野末の墓地よ咲く花の草さへ小さく

花さへ小さき

やがてくる冬ともなれば訪ねくる人もなからむ

墓地は氷りて

ウランバートル日本人墓地晴れたれどひた吹く

風の音のさびしさ

私はウランバートルの病院で亡くなった友人神田正

治君の名を求めて、目を皿のようにして捜した。昭和

一七年、一八年と二年間、武蔵野の寮の同室で、寝起

きを共にした親友だった。しかし、ついに彼の名はみ

つからなかった。

わが友はここにてうせし友の名をたづねてつひ

にたづねえざりき

ささやかな小石に友の名を記し伏してをがめる

その心はも

(神沢有三)

みそちあまりいつとせ前に君と共にくらせしこ

とのひたに思はゆ

(梶村 昇)

満州にありと聞きしに戦ひの終りてのちに君の

死を聞く

(全)

モンゴルのウランバートルの病院に君亡せにき

と友は知らせぬ

(全)

いかばかりみ国を思ひ親思ひふるさと思ひ亡せ

にしか

(全)

亡き友の名を石に書きをろがめば涙あふれてと

どむすべなし

(全)

モンゴルの草原に咲く小草つみ君の墓前に捧げ

をろがむ

(全)

草枯れて風鳴りわたる丘の上の眠れる人に涙手

向けぬ

(木村肥佐生)

あゝあはれ雨風削るとつくにの丘の辺にして眠

る人々

(全)

尽きぬ思いに後ずさりするようにして車のところま

で帰った。車に乗ってからも何度もうしろを振りかへ

り別れをつげた。

日本人墓地守る翁はいつまでも帽をかかげて見送りくるゝ

五、ホジルト

八月二十九日、早朝に起きてウランバートルの飛行場に向った。ホジルトへ行きカラコルムの遺跡を見学するためである。八時一〇分、五二人定員のプロペラ機は進路を西にとって出発した。

見る限り枯草原の高原を蒼き流れのうねりゆく見つ

うねりゆくトーラの川のかぎりなくうねりつゞきてはてのしらなく

低山のいく重かさなるそのはての地平線はもそらにつきたり

草原のつゞきつゞきてその果に地平かすみ山ひとつなく

暫く飛んでいると地上に相当広い四角の農場がいくつも見えてきた。聞くと国营農場だそうである。小麦畑が一面に穂を実らせていてきれいである。

見る限り草原の中に真四角の国营農場いくつも

見えて来つ

モンゴルは今、遊牧民族から定着農耕民族へと変わりつつあるのだろうか。これは大変な変革といえる。宗教の面からいっても、無涯の広野を、家畜を追って水草を求めてきた生活には、頭上にいたたく天空そのものの規則的な回転こそ、彼らにとっての神であったはずである。彼らはそれを「テングリ」とよんでいる。テングリこそは、自然と人生との運命を支配する摂理の力であった。天の崇拜は、その仲介者としてのシャーマンを生み、シャーマンは日常生活の中で、祭司、呪医、呪術、予言の役割を果たしてきた。この構造は遊牧民の基本的信仰構造といえる。しかし、今、モンゴルは遊牧から定着農耕に変わりつつあるとすれば、大

地の恵みに対する信仰……地母神的信仰が生まれてくるといふのであろうか。その可能性はないではない。ただ社会主義下の国营農場ではそうはなるまい。なぜかといえ、そこには大地に対する愛着が生まれてこないと思われるからである。太陽と共に起き、星をいただいて帰る農耕生活の中に、限らない大地への愛情が生まれ、大地の女神に祈る心が生まれてくる。それは、大地をわがものと思う愛着があるからではないか。ともかく、今のモンゴルは、遊牧と農耕との接点に大きな問題がひそんでいるようだ。

飛行機はなおも飛んでいる。国营農場を過ぎると、また草原の連続である。月の表面のクレターを思わせるような穴が万々にあいている。地の果てに來たという感じがなくてもいい。

天地の何のいとなみ灰色の砂の穴あまたつづく
荒野は

地の果に山かと思しは雲ひとつ遠くたゞよひか

がやくなりけり

草原を流るゝ河はうねうねと流れたりけりイン

ドのごとく

雲なきに風の吹くらしすゝみゆく飛行機少しゆ

れはじめたり

点々と白く小さく輝きて見ゆるはバオカ空の旅

ゆく

まかがやく清き流れの見え来しはオルホン河に

そぐぐといふ河

事もなき空の旅かも草原をながむるうちにホジ

ルトにつく

飛行時間正味一時間、九時一〇分、ホジルトの飛行場についた。飛行場とはいってもただの草原に過ぎない。モンゴル中が飛行場だといってもよいであろう。

降り立てば草かぐはしく空澄みて清き天地何と

いふべき

飛行場からホジルトの町まで車で五分。出迎えの人

人と一緒に宿舍のパオにつく。一度泊ってみたいと思っていたが念願が叶ってうれしくなった。パオは三〇棟ほど建っていて、東ドイツ人一行二〇数名も一緒である。一つのパオには四つのベッドがあり、下にはジュタンが敷いてある。一般のパオにはジュタンはなく草原の上に直接建てるのだそうだ。洗濯のきいたシートで、ベッドがきちつとしつらえてあり、すこぶる快適である。安っぽいホテルなどの比ではない。

ホジルトはものみな澄みてかけりゆく鳥の羽ぶきの音さへ聞ゆ

ホジルトのますみの空をかけりゆく鷹の羽白く日にすきて見ゆ

かぎりなく大気はすみて草原のはての尾の上の馬さへも見ゆ

ホジルトの草原に寝て蒼き空あかすながめつもの思ひもなく
(梶村 昇)

一休みしたあと近くの草原にクロムレック(環状列石)

を見にゆく。あるわあるわ、歩いているところが全部クロムレックの中と思われるほどである。大きいのは直径五〇メートルほどもある。完全に円状に大きな石を並べ、中央に角ばった積石がある。いつ時代のものであろうか。一般には新石器時代を代表する遺跡であるといわれているが、この人たちは、これらを「キルギスの墳墓」と呼んでいるそうだ。そして、今でもこの中には馬を乗り入れないという。考古学者が見たら涎を流すだろうと思われるような古代の石斧や石槌らしいものが、いくつもころがっている。にわか考古学者たちは頭をひねって、自分の結論に自分で納得している。

迎えに来た車に乗って、われわれは牧民のパオを訪ねた。馬に乗せて(あるいは坐らせて)もらったり、パオの中で馬乳酒(アイラク)を飲ませてもらったりして、ほんのちょっぴりモンゴル生活を味あわせてもらった。この家のようにモンゴルの草原(都市ではな

いという意味）に住む人は、全国で七〇万人いて、それらはほとんど合作社のメンバーということになっているそうだ。合作社は全国で二五九社あり、それらが二三の国营農場に分れて働いている。牧畜は、たとえば二〇頭の馬を飼っている場合、そのうちの二〇％は個人所有、八〇％は国有であり、国有のものを管理するために一軒あたり六〇〇トグrik（一万五千円位）の給料が入るようになっていているという。医療と教育は無料だそうであるから、生活は安定しているといつてよいであろう。そのために、ほとんどの家にはオートバイがあり、かつて草原を馬で駆けていた代りに、これからはオートバイで走るようになるだろうという。「今どきの若いものは馬にも乗れない」と歎く老人がすでにいるということだから、蒙古草原を立ち姿で馬を走らせる英姿はいずれ見られなくなってしまうのではなかろうか。

一度パオに戻つて、午後三時、カラコルムに向つて

出発。約二時間ほどで到着。

はてしらぬ草原来れば忽然と白壁の大きな寺院見
え来つ

まったくこの歌のように、何もない草原に忽然と大きい寺院が現れてくる。定着文化をもつ国々では、かつて見られなかったことである。たとえばゴースト・タウンでも廢墟は残っているはずであるが、ここには何もない。ところで、われわれはここをカラコルムと言つてきたが、これはカラコルムではなくエルデネ・ゾー（大乗法輪院）というラマ寺院なのである。

カラコルムはチンギス・ハーンの子オゴタイ・ハーンが一二三五年、このエルデネ・ゾーのすぐ近くに宮殿（万安宮）を造営し、大モンゴル帝国の首都としたことに始まる。モンゴル帝国の首都ともなれば、たちまちに国際都市となる。一二五四年、フランス王ルイ九世の使節僧ルブルックはここに到着、ハーンにキリスト教への改宗をすすめているが、彼の見聞記は当時

の宮廷のありさまを今日に残している唯一のものとして有名である。それには宮殿の庭に銀製の大樹があり、そこから四種類の酒がでるようになっていてと記されている。その画は国立中央博物館にかけられていた。しかし、世祖フビライ・ハーンが一二七一年、都を大都に遷してからは、カラコルムは省都にすぎなくなり、その後、元の滅亡と共に人煙まれな都となってしまった。一六世紀、ラマ教黄帽派がモンゴルに勢威を得るようになると、カラコルムに一大ラマ寺院が建立された。それがこのエルデネ・ゾー寺である。一五八六年アバダイ・ハーンの時のことである。ダライ・ラマから給った仏像が安置されていたという。寺の周囲の一〇八の塔は、往時の盛大さを偲ばせるものがあるが、今は荒れて、ただ管理人が一人住んでいるだけになっている。一九二一年の人民革命と、それ以後の闘争によって破壊されてしまったという。今は文化財保護という名で保存されているに過ぎない。ラマ教信者にと

っては涙のするほど悲しいことであろう。

エルデネ・ゾー寺を出て、その裏に廻ると、亀の形をした大きな礎石がある。これが本当のカラコルム宮殿の礎石である。一八九一年、ラドロフ探検隊が発見したという。その亀の礎石に続いて、大きな礎石が点とある。日本ならばすぐに全貌を明らかにするところだが、ここではそれがはつきりするのはいつのことであろうか。

旅遠くわれら来りてカラコルム大礎石の上に
立ちたり

七時近くカラコルムを出発、途中、巨石の男根を見たりして八時五〇分、パオに帰る。蒙古平原に日は落ちて、月が昇り、何ともすばらしい風景であった。文字通り「月は東に、日は西に」である。

日ざしなほ残れる草の丘の上に大ききモンゴルの
月出でむとす

草丘に西日沈みて草丘に日よりも大きき月いでに

けり

日は西に沈みやらぬにもち月の東にのぼるモン

ゴルの空

(神沢有三)

八月三〇日、パオでの一夜を明かす。ストーブを燃して寝たのであるが、もちろん朝までもつわけはなく明け方は毛布を頭からかぶって暖をとった。ストーブの煙突のためにあけてあるパオの天井から、皎々たる月の光がベッドにさしこみ、耳をすませば、馬がパオのそばによってきて草を喰んでいたと同室の夜久先生はいう。私は知らずにぐっすり寝こんでいた。

目ざむれば望月のかげ皎々とパオの窓より我をいてらす

天窓の月見てあれば草をはむ馬の音すもパオをめぐりて

ホジルトの岩山の上にわれ立ちてモンゴルの日ををろがみにけり

草山をいづる朝日にてらされて小草咲く野をゆ

くがたのしさ

鳥の音のかた見返れば草丘の尾の上の空を二羽

かけりゆく

今日は勉強は休み。一日オルホンの滝を見て休養ということで、一一時一〇分、車の故障も直ったところを出発。道のあるかなきかのようなところを走り、川も浅瀬をみつけて走り通るというような具合で、体の方は一向に休養にはならないが、モンゴルの自然を満喫というところだった。一二時一〇分、小休止。

ウールティン・トハイのがけの上にいこひてオルホン河の瀬の音をきく

ウールティンとは「永遠の」、トハイとは「曲線」という意味とのこと。オルホン河がこで急激にカーブを描いている場所である。絶景である。

絶壁の上より見下すオルホンの川清くして魚あそぶ見ゆ

川岸に木々のしげりてオルホンの谷ま美し草原

くれば

小休止のあと再び車に乗り、行くこと一時間三〇分午後一時四五分、漸くにしてオルホンの滝に到着。モンゴルの人は「オルホンの滝を見ずして美しいということなかれ」というそうであるが、なるほど二三メートルあるという落差をオルホンの滝は、ごうごうとたぎり落ちてゐる。

だうだうとたぎちおちおつオルホンのたきのひびきの谷にとどろく

オルホンの滝のおち口おちたぎつ白き流れの日
にきらめけり

落ちに落つオルホンの滝うちしぶき虹さへ見え
つ滝壺のへに

滝つばに落ちたぎつ滝の水しぶき滝の上まで舞
ひあがりけり

昼食に金串にさした羊の焼肉をいただいたが、モンゴル滞在中で、一番おいしい食事だった。食事後、地

の底に下りるのではないかと思われるような岩山を恐る恐る下りた。そこには滝つぼがある。釣の好きな鯉釣りさんは、用意してきた道具を出し、早速釣を始める。三〇センチほどの虹ますのような魚が、一時間ぐらいで一三尾釣れた。夕食の塩焼を期待して五時過ぎ出発。車は日の暮れてしまった草原でエンコしてしまつた。ソ連製の頑強そのもののようなバスではあるが、山でも川でも跳めるようにして走るのだから、エンコするのも無理はない。

暗くなつた草原に座つて、私たちは同行したモンゴルの青年ボルドー君の歌を聞いた。母親と年老いた馬とによせる愛情を歌つたものだというのが、その哀しい調べには、意味のわからないままに、胸のつまる思いがした。

ホジルトの若き男の子がくさ原に坐して歌ひし
歌忘らえじ (梶村 昇)

パオまであと三キロを歩く覚悟をしたとたん、バス

のエンジンがかかった。一〇時近く、バター焼にかわってしまっただけども、舌づつみをうちながら今日の魚をいただいて就寝。

八月三一日午後四時、再びウランバートルに帰ってきた。われわれは科学アカデミーグループと日本大使館グループの二組みにわかれて、報告、挨拶がてら会食をした。下痢はいっこうにおさまらないのに、山盛りの羊の肉のご馳走はつらかった。大使館組は、おすしにおすまじだったという。

九月一日、それこそ朝食前に、小学校の入学式を見学に行った。モンゴルの学校すべてが、今日、入学式なのである。われわれの行ったところは、案内のサロールさんの卒業したという、名門校チョイバルサン第一中学校である。小学生の入学式を見に、中学校へ行くのも変なことであるが、モンゴルの教育制度はなかなか厄介なのである。

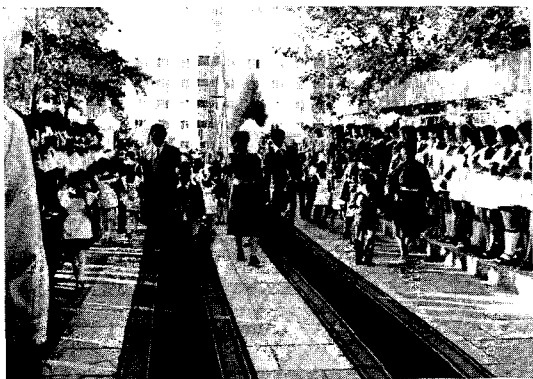
学齢は八歳で、小学校は四年制、その上に、中学校

が三年制、六年制とあり、これを通算して同じ学校で教えるために、前者は七年制中学、後者は一〇年制中学ということになる。七年制を卒業すると専門学校に入学する資格が得られ、一〇年制を卒業すると大学受験資格がある。義務教育は、農村で七年、都会は一〇年であり、教科書以外は無料とのこと。就学率は九九%というから大変な数字である。

われわれの行ったチョイバルサン第一中学校は、一〇年制中学である。朝早くから母親に連れられた新生児たちは、洋服に手さげかばん、女の子は髪にリボンをつけ、男女ともに、手に手に花束を持っている。軍楽隊の演奏で式が始まり、人間味溢れるような校長先生の挨拶、この学校の卒業生のうちの有名人なのであろう、年輩の方の祝辞、在学生代表の歓迎の辞、それに声楽家のすばらしい独唱などがつづき、式が終ると新一年生たちは、手にしていた花束を、それぞれ先生や来賓たちに捧げる。私たちもみんな花束を頂戴し

恐縮した。新一年生は総数六〇人ほど、それが四組に分かれ、それぞれ担任の先生がついている。在学生の代表たちが並んで歓迎する中を、新一年生は担任の先生にみちびかれて校舎に入っていく。父兄たちは、道路に集って拍手をしながら、これを送っている。

すばらしい入学式であった。入学式後、われわれは校長先生について、いくつかの教室を見学した。子供たちは、きちっとした規律の中に、しかも子供らしさを失わない伸びやかな表情をしていた。私は、私の小



担任の先生に引率されて校門に入る新入生

学生であったころの日本の教育を思いだした。先生方の表情の中にも、政治やイデオロギーなどを超越した教育者らしい雰囲気を感じることができた。そういえば、汽車の中で会ったゲレルちゃんにも、私たちは昔の日本の少女を感じていたわけである。モンゴルの最後の日に、われわれは、すがすがしい思いに触れることができて何よりであった。

公式行事はなおいろいろと続いた。夜、九時近く、すべての仕事を終り、明日の出発の準備をして寝に就いた。みんな心身ともに相当参っているようだ。しかし収獲の多かったこの研究旅行はありがたかった。

モンゴルを去る日に、私はモンゴルの文化ということを考えてみた。日本を初めとして、われわれは、文化というものを定着民族の物さしで測っている。そうすると、遊牧民族の文化というものは、狩猟文化などとともに、文化のもっとも初期の段階のものと考えるわけであるが、遊牧民族からいわせれば、それは、定

着民族の勝手な考え方で、遊牧民族には、遊牧民族の文化の物さしがある、というのではないだろうか。

それならば、その文化とは具体的にいつて、何か、と問われると、何と答えるだろうか。ユーラシア大陸を席捲したチンギス・ハーンあの爆発的エネルギーが、それだと答えるかも知れない。たしかに、あのエネルギーのもとに、定着民族はじゅうりんされてしまったのであるから、偉大なる文化といえるかも知れない。そして彼らは、それにとまなう独創的な文学や芸術作品をモンゴルの誇るべきものとして考えている。たしかにモンゴルは詩の国である。定着民族の文化はあまりにも虚飾にみちてはいないか。「なまの人間のロマン」が、本当の人間の文化ならば、モンゴルの詩はそれを表現しているのかも知れない。遊牧のロマンと定着の文化と、その綜合が現在のモンゴル人に課せられた課題ではないだろうか。外務省文化局長のホンジヤブ氏に会ったときに、私はこのようなことを申し上げておいた。

三十一歳で夭折した薄幸な革命詩人ナツアクトルヂ（一九〇六一一九三七）の銅像が、スフバートル、チョイバルサン、レーニン、スターリンの銅像と共に、ウランバートルにある五人の銅像の一つとして、チョイジン・ラマ寺院の前庭にある。詩がモンゴルの人々の心に占める比重の大きさをつくづくと思わされた。

彼の詩を木村肥佐生先生に訳してもらったので、それを掲げて、青い空の国モンゴルにお別れしよう。最初の詩がもつとも人口にかいしゃされている彼の代表作である。その一節だけ。

わが故郷

ケンティ、ハンガイ、サヤンの美しい高峰よ

北方を飾る森林に蔽はれた険しい山々よ

メネン、シャルガ、ノミンの広漠たる大ゴビよ

南方に広がる沙漠の海原よ

これぞ わが生れし故郷

美はしき地　モンゴル

私は誰、あなたは誰

われら二人　この宇宙の小さいいのち

われら二人　宇宙のさゞ波に浮び

ただよひめぐり会った

われら二人　どんなに激しい嵐に遭はうとも

結んだ手を離さない

それが二人のさだめなのだ

私はどこで生まれ

あなたはどこで生まれたか

われら二人　モンゴルの土地に生まれ

その水で産湯をつかった

われら二人　もとよりお互ひを知らず

しかし求め合つて互ひを得た

われら二人を引き離せた人はいない

お互ひ、会つて、恋して、一緒になった

私は　あなたを愛し、あなたは私を愛した

われら二人　いつも心は一つ

いつも二人は一緒

われら二人　離れれば飢える

われら二人の小さい心は

われら二人は地上のオシドリだ

二人の心は　お互ひ　眺めあつていれば

いつも満たされる

(一九三二年作、以下略)

六、再び北京へ

九月二日、一〇時四〇分、ホテルを出発、途中、日本大使館に挨拶に寄り、ウランバートル駅に着く。大使館やアカデミーの方々の見送りをうけて、一一時四〇分、定刻に出発、こんどは北京行普通列車なので、所要時間は四三時間、車中で二泊しなければならぬことになる。

ウランバートルに來たのは一〇日前のことであつた

が、今、車中から見る木々の葉は、すでに黄葉している。あと一週間滞在すれば、確実に雪が見られるとのこと、モンゴルの瞬時の秋を惜しんで、時速四〇キロの汽車は一路南下をつづける。中国領に入るまで食堂車の使えないこの列車では、持參の食料を食べるしかない。われわれは、ここですべておきのカップヌードル、インスタント味噌汁、キュウリの漬物で昼食をとつた。羊の肉と乳製品の攻勢に參つていたわれわれには、このインスタント食品がどれだけ嬉しかったことか。遠く離れた異郷の列車の中でも日本食が食べられるということで、インスタント食品は、すっかり賛美され、はては日本の国力を示すものだ、とまで称賛された。

食後、それぞれ所定のベッドで、何をするという気力も失せたように、ウトウトしながら窓外の蒙古草原を眺めていた。暫くすると夜久先生が高笑いしながら

歌を一首よみだした。

汽車のゆく右も左も草丘のかぎりなくつゞきて

空をかぎれり

というのである。「右も左も」と詠んだことが、グツタリしているわれわれの気持ちにぴったりで、みんな大笑いをした。吸いつかれるように窓外に眼をこらしていた往きの汽車とは大変な違いである。

來る時もそうであつたが、帰る時にもまた、国際緊張に巻きこまれた庶民の哀しみを味あわされた。ウランバートルの駅で、五〇人ほどの中国人が、みんな泣きじゃくるようにして送り、送られている姿が見られたが、見送られた二〇歳前くらいの二人の女性が、私たちの近くに席をとっていた。別れが悲しいことはわかるが、中国へ行って帰ってくるだけにしては、ずいぶん大げさなことだ、やはり中国人は「白髪三千丈」式なのだなあ、と思つていたが、そうではなかった。彼女たち二人は、中学の同級生で、中国人にとっては

住みにくいモンゴルを捨てて、まだ見ぬ祖国中国へ行くのだという。いわば亡命なのである。恐らく再びは会うことのできない両親や兄弟に別れを告げたのである。その悲しみがいかばかりであったか、私は、私の邪推を申しわけないと思った。さみしいのであろうか二人ともよく私たちの席へ遊びに来た。はずかしさを含んだ笑顔と、楚々たる風情は、昔の日本の乙女を思わせるものがある。彼女たちが国外に持ちだせる金額は、わずかに一〇トウグルク（三千円ほど）であるという。一〇トウグルクで何をしろというのであろう。それは死ぬというにひとしいことなのだ。「昨夜母は一晚中泣いていました」と、彼女は、果てしない草原の一角を見つめたまま話していた。民族の相剋の激しさを思った。二人の未来に幸あれ。

夕食はまたわれらの誇るインスタント食品だった。国境を越えるのは午前四時だというので、早めに横になった。手すりのない上段の席は、いつ転がり落ちる

かも知れない。私は麻ひもで体を縛り、網棚に結んで休んだ。

午前三時五五分、国境の町ザミンウデに到着。間髪をいれず国境警備兵が乗りこんできた。出国のときはカメラがやかましい。未現像のフィルムを出せ、ということで、われわれはカメラからフィルムを抜き出して渡した。人工衛星からみると、馬の歩いていることまでわかるという時代に、われわれのフィルムを取りあげて何になるというのであろうか。本当のスパイなら、取りあげられるフィルムに、秘密など写してはいやしない。とすれば、これは旅行客に対するいやがらせ以外の何ものでもないことになる。モンゴル政府はよくこのことを考えて、得にもならないことは一日も早く改めるべきだ。そして、モンゴルを訪ねた人が、楽しい思いをもって国に帰れるようにすべきだ。その方がどれだけモンゴルのためになることだろう。あえてモンゴル政府に直言する次第である。

国境の駅に停車すること五時間、汽車は午前九時、ザミンウデを出発、一〇分後に、中国国境の二連駅に到着。ここでもまた停車すること五時間、われわれは汽車を下り、洗面をすませ、ひさしぶりに中国のお粥に、持参した梅干で食事を取り、街を散歩した。「外国人はこれ以上入るべからず」という立札が方々に立っていて、われわれは駅前の一本道だけを歩かせられることになっている。二連からモンゴルの方をみればまったく海のようにみえる。

朝日さす草原のはておのづから蒼くかげりて海
原のごとし

水なきにたふれにけむか酷熱の二連の町に死ぬ

小鳥見つ

午後二時六分、汽車は二連駅を出発。ゴビの砂漠が一望につづく。その砂漠が、今や、徐々に耕やされて農場に変わりつつある。驚くべく、恐るべきことだと思った。もし、ゴビが農耕地帯に変ったならば、それは

黄河の治水とともに中国史上特筆されるべきことになろう。酷熱のゴビ砂漠は、冬がくれば零下四〇度にもなるといふ。それを誰が好んで耕すというのであろうか。しかし、現に農場は次々に広がっているといふことは、誰かが来て耕したということだ。

木も生えぬゴビの地になほ泥壁の家を造りて進
む漢人

遊牧の民らを追ひてゴビの地に町づくりする漢
人ををし

午後四時、サイハンダラー駅に着く。

とまりたる汽車おのづから雲の影に入りてわづ
かに暑さ知らぐ

愛らしきピオニールたち外国人われらを見張れ
りヅルフの駅にて

徳王の王府のありしはこの辺と聞きてすぎゆく
ヅルフの駅を

日本をたよりしモンゴル徳王のかなしき一代の

話をきゝぬ

午前一時四〇分、張家口の駅につく。中国の二人の乙女のうち、一人がここで下りた。どのような世界が彼女の前途にひらけてゆくのであろうか。

明け空にすみゑのごとくそびえたる八達嶺の谷を汽車ゆく

有明の月輝けどあけぐれの谷ゆく汽車に長城見えず

九月四日、午前七時、定刻に汽車は北京に到着。「定刻に着いた」と感心してはみたものの、四時間も五時間も停車しながらのことであるから、それも当然のことかも知れない。

片われの月かゞやきて明けなむ緑野を汽車は北京に帰る

新僑ホテルに入る。お湯がふんだんに出ることが何よりもうれしく、頭の上から足の先までゴシゴシと洗った。夜久先生は、また歌を一首、笑いながら披露し

てくれた。

モンゴルを離れて二日鼻汁の出るに気づきぬ北

京の宿にて

乾燥していたモンゴルでは鼻汁もでなかったということである。私は、それをまぜつかえすように、

モンゴルを離れて二日かたき便出るに気づきぬ

北京の宿にて

と返して大笑いした。実際、誰もがそうだった。モンゴルの水があわなかったのか、羊の肉が多かったか、乳製品が多すぎたか、寒暖の差が激しかったか、未だにその原因はわからない。

午後二時三〇分、われわれは、とある建築機械工場を訪ねた。話題になっている地下壕の見学のためである。防空壕専門委員といわれる三〇歳くらいの女性が滔々と話し始めた。テープからその一部を転載してみよう。

われわれは、修正主義と社会帝国主義とからの戦

争を未然に防ぐために、一九六八年から、毛主席の「戦争に備える」という趣旨に基づいて地下壕工事を開始しました。われわれはこれを自分たちの力で掘りました。使用した煉瓦やセメントは、工場の廃物利用です。まだ十分ではありませんが、毛主席の「深く地下壕を掘り、食料を貯え、覇権をとえないう」という指示に基づき、今後なお立派なものにしていきたい。地下壕の長さは二千メートル、総面積四五〇〇平方メートル、この工場の職工二五〇〇名は、五分間で全員収容できます。出入口二〇数ヶ所、東西南北とも他の工場につながっています。食糧保存倉庫があり、百トンの食糧が保存され、全工員が二ヶ月食べられるだけあります。電話センター、指揮ステーション、井戸、台所、食堂、文献室、救急室等が完備しています。全部見学するには二時間半かかります。

というのである。われわれはその一部を拝見した。深

さ一〇メートル、道幅一メートル、聞けば北京の街はこうした地下壕でほとんどつながっているという。まさに臨戦体制である。中国人は戦争が始れば、地上から姿を消し、地下にもぐる。それを殺し尽すことはできない。かくて相手は戦いに疲れる。戦争に勝たないけれども負けはしない、ということであろうか。泰平無事な日本とは、まったく対照的といわなくてはならない。

九月五日、九時、こんどは北京一七一中学校を參觀した。校門を入ると「日本の友人を熱烈歓迎する」という掲示がある。数人の人が拍手でわれわれを迎え、すぐ応接間に招待してくれた。そこにはお茶、煙草が用意してある。前の工場とまったく同じ形である。教育革命委員会副主任という四〇歳年配の先生が、歓迎の挨拶と説明とをしてくれる。再びテープからその一部を転載してみよう。

今日は学校が始まって一週間目です。今、私たち

は党の第十一回人民大会の文献を学習しています。その中でも、とくに華主席の科学研究についての文献を学習しています。二〇世紀の末までに、党の推進する四つの近代化を実現する人材を養成しようとしています。ご承知のように、四人組がいたときは教育は大変な損害を受けました。われわれは、その損失を取りもどすために頑張っています。

この中学は五年制で、生徒数は一九五〇人、必修科目は、中国語、政治、数学、体育、外国語です。この学校の外国語は英語とスペイン語で、他の学校は他の外国語をやっています。選択科目は、物理、天文、化学、生理、歴史、地理等があります。われわれは、毛主席の「教育はプロレタリア政治と結びつかなくてはならない。生産と結びつかなくてはならない」という教えに基づいて教育しています。そこで、生徒に社会主義の自覚をもたせるよう教育しています。生徒は、卒業して、大学進学、三大革命

（農業、工業、科学）運動すなわち実社会にでるものとに分かれます。教育方針は、毛主席の五七年指示、すなわち「学生は学業を主として他のものを兼ねる」によっています。一年間のうち教室での教育は八ヶ月、農場、工場への参加各一ヶ月、夏、冬の休み各一ヶ月です。そのほか、学校内に、学校工場があり、地方に農業分校があります。教員は一七〇人いて、うちの四〇人は工場の古参労働者です。生徒は一三歳から一七歳で、みんな学校の近くの子供たちです。ともかく、われわれは四人組によって破壊された損失をとりもどそうと努力しています。

以上が説明であるが、教育がまったく政治に密着していることは驚くべきことである。このあと、三年生の授業を参観させてもらったが、ここでも毛語録の勉強をしていた。歓迎の演奏会があるというので、音楽教室に入ると、最初に七人の女の子が薄化粧して、歌と踊りを演じてくれた。その歌の題は「華主席は私た

ちの心を知っている人」というのである。次は「チベット民族の人は毛主席を懐しく思う」、次は胡弓の演奏で「解放軍を称える」、ついで女性の二重唱で「華主席は私たちをひきつれて大塞に学ぶ」世々代々毛主席の恩を胸にきぎむ」、次に笛の独奏で「草原上の鉄騎兵（モンゴル民族の歌）、女性の独唱で「敬愛する周総理を偲ぶ歌」、ピアノ独奏「白毛女より北風吹いて」、民族楽器の演奏で「錦を毛主席に捧げる」小さな民兵を演じてくれた。

それぞれ熱心に演奏してくれた。みんなすばらしい演奏で驚かされた。とくにピアノの演奏をした中学二年生（小学校が五年制なので、日本の中学一年生）の腕前は大変なもので天才的ともいえるであろう。

このあと、座談会があったが、その時の話を総合すると、やはり一種の特殊教育をして、天才的なものはどんなのぼしていく方針をとっているとのことであった。画一的教育の中に、国家の要請に応じた教育を

行なっていることがはっきりとよみとれた。私たちの質問も、大学進学問題、職業選択の問題等きびしい問題を提出したが、いずれも、個人の希望は考慮しているとはいうものの、結局は、国家の要請によって、君は大学、君は工場、君は農場というように、割り当てが上からきて、それによって動かされるということであった。おもしろいことは「子供たちは喧嘩しますか」という質問に、「四人組当時は喧嘩がよくあったが、去年の十月以降、四人組が失脚してからは、一回の喧嘩しかない。こういう子供には思想教育をすることにしている」ということであった。子供の喧嘩も四人組のせいであることがよくわかった。

中学の校門の前で記念の撮影をし、「日本人民によりしく」という挨拶を受けて辞去した。あと、天壇公園、歴史博物館と見学をし、いささか疲れてホテルに帰った。歴史博物館では、孔子の批判に興味がもたれた。『論語』の中の封建的な言葉が大きく書きだされ、

それを批判するというものである。私は内心、孔子の批判はそう長くは続くまいと思っていたが、もちろん口に出すようなことはしなかった。孔子の思想は、何といつても、中国二千年の歴史を貫くバックボーンであつた。儒教は宗教ではない。しかし、中国の民衆たちは、宗教にひとしい働きを儒教の中に見いだしてきていたはずである。原始宗教が、いつまでも民族の三つ子の魂として消え去らないように、中国民衆にとつては、儒教の精神が、彼らの心の中から消えてなくなることはないはずだ、というのが私の考え方である。（私たちが帰国して間もなく、歴史博物館の説明員が「孔子は教育上、文化上の面などでは立派な貢獻をしてきた」というように説明するようになった、と日本の新聞で報じていた。（九月二四日北京発共同）まだまだ曲折はあるかも知れないが、中国二千年の歴史を貫くバックボーンは容易に消滅することはないであらう）

夕方近く買ひものに出かけた。物価は安い。恐らく日本の十分の一とみてよいであらう。外国人のための友誼商店には、品物も相当ある。毛皮、玉類、食料、骨董、敷物、布地、皮革類等々、中国在住の外国人たちも多く買ひものにきている。中でも日本人が多いのは、どここの国へ行つてもそうであるが、北京までそうになっているかと驚かされた。国交が回復して、自由に往来できるようになったなら（果してそうなるかどうかかわからないが）日本人で溢れるのではなからうか。

七、帰国

ことなくて帰国の朝となりにけり腹すこし痛けれどやがていゆべし

北京市のホテルにさめてうつゝなく聞く音の中に馬の足音す

自動車の騒音の中にきこえる馬のひづめの音のなつかし

九月七日、帰国の日となった。荷物は二〇キロまでということ、何回も秤にのせて大変だった。ともかくホテルを出発したのであるが、日本のように「ありがとうございました」という従業員の挨拶があるわけでもなく、なんとなく、なつかしさに水をかけられたような気持であつたが、こちらが勝手に「さようなら」と一人で名残りを惜しんで引きあげた。

空港へ行く並木道は相変わらず美しい。しかし、到着したときのような興味はない。むしろ、ゆったりとした気分で、フルスピードの車に身をもたらせて、秋の美しい北京の空を眺めていた。「北京秋天」の日々がこれから毎日続くことであろう。空港には、私たちのグループ以外に、四、五人の客がいるだけで閑散たるものである。案内をしてくれた毛さんのてきぱきした行動で、何のこともなく簡単に出国の手続きを完了した。

飛行機はイラン航空 I R 八〇〇便である。東京へ直

航とはいっても、やはり上海上空を通過してのことらしい。一〇時三〇分、北京空港出発。お客も少なく、みんな窓側に席を占めて快適である。

遠空に積乱雲のつらなりてそこに一つの国あるごとし

海ゆ吹く風にかあらむ吹きよする霧雲つきて飛行機はゆく

目の下に洪水なるらし大き川あふれて田畑の水かぶりたる

漠々とつらなる雲の海の上を飛行機はしづかに日本に向ふ

高度一万メートル、三時間で東京につく。

緑こき山野見え来つ密集する市街見え来つ日本の国ぞ

水清く島山清くおだやかな入江見え来つ何島ならむ

九州の本土は雲におほはれて晴れたる海辺を飛

行機はゆく

つつがなく我帰り来ぬ妻子らのすこやかならむ
ことをこそ祈れ

東海の浜辺見え来つ内陸は白雲深くとざしたる
まま

飛行機はただ白雲の中をゆく晴るれば富士の見
えむあたりを

すそ長くひける富士がね遠く見えてたちまち雲
の間にかくれぬ

午後三時二〇分羽田空港に到着した。つつがなく帰
国できたことをありがたいと思う。（一九七七年九月

三〇日記）

（なお、この旅行の記録は、九月二七日（火）午前一〇時
から富士テレビを通じて全国に放映された。岡部篤厚
氏の８ミリは、非常に評判がよく、またモンゴルの事
情も国内に報道されたので、日本・モンゴル文化協定
の意義も生かすことができ、うれしく思っている）

アジア研究所彙報

一九七七年度活動報告

☆新運営委員選出さる

任期満了に伴う運営委員の選出が去る五月十八日に開催されたアジア研究所研究員総会に於いて行われ、新運営委員に次の各研究員が選出された。なお、運営委員の任期は二年である。

王瑜教授、神沢有三教授、倉前義男教授、寺田剛教授、進藤義彦講師

(以上教養部)

楊天溢教授、上村祐一助教授

(以上経営学部)

飯島正教授、稲葉昌幸教授、菊池威助教授
(以上経済学部)

清瀬信次郎教授、西俣昭雄教授

(以上法学部)

小倉幸義講師(日本経済短期大学)

☆新職員紹介

本研究所の司書として、新たに栗原保子さん(図書館短大卒業)が四月一日から勤務している。

☆新研究員および研究テーマ

古川哲史 日本倫理思想のアジア的

背景

嘱託研究員

北沢丈夫 アジア諸民族の精神的交

流について

佐藤三郎 日華文化交流史の研究

橋内武道 近代日中関係史の研究

山室三良 中国古代思想の研究

ペマ・ギャルポ チベット・中国関

係史研究

☆海外実地調査研究

〈共同研究〉

研究テーマ：モンゴルの近代化に
関する総合的研究

研究者：梶村昇教授・神沢有三教
授・夜久正雄教授・木村肥佐生講
師・鯉渕信一研究員

調査国：モンゴル人民共和国

調査期間：八月二二日～九月六日
本研究は日本・モンゴル文化協定
に基づく一九七七年度行事として行
なわれたものである。

研究テーマ：アジア諸国における

企業経営の国際比較研究

研究者：杉本常教授・服部正中教
授・本多壮一教授・馬場房子教授
・楊天溢教授・上村祐一助教授

調査国：大韓民国

調査期間：九月二二日～十月二日

〈個人研究〉

研究テーマ：欧米に於けるアジア研究の実態調査

研究者：大平善梧教授

調査国：アメリカ・イギリス・オランダ・スイス・ポルトガル

調査期間：八月一日～九月一日

☆講演会報告

○日時：十一月一六日（水）

講師：清水徳藏氏

テーマ：最近の中国情勢

○日時：十一月一八日（金）

講師：インディア・オフィス文庫

史料館副館長

アンソニー・ファリントン氏

テーマ：イギリスの東南アジア及び日本への通商路開拓の歴史

○日時：十一月一八日（金）

講師：本研究顧問大平善梧教授

テーマ：ヨーロッパにおけるアジア研究事情

☆所報紹介

第7号・五月三十一日

目次

人種形質としての蒙古班 武部 啓

モンゴルにおけるチンギス・ハン

評価

木村肥佐生

アジアの窓

大平善梧

アメリカの大学におけるアジア関係の語学と留学生 王 瑜

オランダ共和国の成立と展開

渡辺與五郎

アジア史研究の課題

佐藤正哲

漢詩の英訳

浅見方舟

ネパールの民話〈その四〉

島田輝男・淳子

第8号・一〇月二九日

目次

モンゴル学術調査隊が帰国

中国の古代青銅器と古墳の壁画

夜久正雄

アンダルシアにて

下島 連

アジアの窓

小田村寅二郎

漢方雑談

宮田斉門

一地域研究者の感想

丸毛 忍

オランダ共和国の成立と展開(2)

渡辺與五郎

著書紹介「南方仏教」その過去と現在

梶村 昇

☆紀要の購読について

購読ご希望の方は、左記によりお申し込み下さい。

記

一、申込先——東京都武蔵野市境五

一四四一〇（〒一八〇）

亜細亜大学アジア研究所

一、購読料——年間一五〇〇円

（紀要一冊、所報年三回を含む）

お申込みは現金封筒にてお願いいたします。

編 集 後 記

アジア研究所紀要第四号をお送りいたします。今回は、日本とアジア、アジアと世界、という、いわば、国際関係論的色彩の多い紀要になりました。「明治時代における中国人の明治維新観について」の佐藤三郎先生のご労作、「キリスト教と日本国憲法―宗教と法―」の増田福太郎教授のご論文、また、「長崎における華僑についての若干の考察」の三村芙美子講師のご研究は、いずれも、日本を外国及び外国人の眼によってとらえようとするものであり、浅見方舟教授の「TIMEの眼でアジアを見る」は、アメリカから日本を含むアジアを眺めたものであります。

今さら言うまでもないことですが、身近かな問題を国際関係の視野に立って眺めてみることは、独り善がり
の盲点をするどくつくってくれるもの

があります。この意味で、諸先生のご労作は誠に貴重なご研究と存じます。なお、佐藤三郎先生は、山形大学文学部長をご辞任後、ご専門の「日華文化交流史の研究」をテーマに、本研究所の嘱託研究員としてご協力をいただけることになりました。その第一作でもあり、厚く御礼申し上げます。

飯島正教授、佐藤正哲講師のご労作は、前回、前々回にひきつづいての「インド・ネパール研究」であり複雑極まりないインド・ネパールのカースト制、村落社会にメスをいれたものであります。容易に結論の得る問題ではないだけに、今後とも学際的立場からのご研究が期待されます。とくにカースト制については、問題が困難であるだけに、大変なご苦勞があったようにうかがっておりましたが、それだけに文字通りのご労作と思われま

進藤義彦先生の「モンゴル・タタールのロシア支配」と、梶村・夜久教授の「中国・モンゴル紀行」は、次号に予定されている「モンゴル研究特集号」の一部となるものであります。が、分量や時期的な問題もあって、本号に掲載させてもらいました。とくに「中国・モンゴル紀行」は、「韓国」(第一号)「ネパール」(第三号)につづいての第三作目であり、アジア諸国を歌と文で綴る『奥の細道・アジア版』といえましょう。続稿が期待されます。

寺田教授、裴徳煥客員教授、中下正治先生のご研究は、それぞれ一号及び二号からの続きであり、完結後は何とか単行本として刊行できれば、と願っております。

今号から漸く年内刊行の運びとなりました。今後ともご指導ご協力をお願いする次第です。(K)